



平成27年度「篠ノ井西中学校 学校通信」



布施だより

発行日 平成27年5月27日

第7号(183号) 校内版

長野市立篠ノ井西中学校

電話(026)292-0244

FAX(026)292-7880

担当:教頭 中山

《 無力じゃない! ~ ボランティア講演会から~ 》



ボランティア委員会主催の、今年のボランティア講演会は5月22日(金)西沢沙織さんをお招きして、飯島春光先生とのインタビュー形式で行われました。演題は「学生ボランティア活動から感じたこと」。

西沢さんは平成20年度に篠ノ井西中学校を卒業された本校OBの方です。中学時代は30人のメンバーで吹奏楽部(クラリネット担当)に所属し、活躍をされていました。高校では国際教養科で英語漬けの生活を送られ、大学に進学してからはNPO法人国際ボランティア国際協会<インタビューサ  >に籍を置かれています。そしてそのボランティア活動を通じて感じ、考えられてきたことが講演の内容でした。

「なぜボランティア?」・・・活動されていた先輩達が格好良く見えたからでした。NPO法人国際ボランティア国際協会のポリシーは<熱意は人を動かし、社会を動かす>です。そしてボランティアの活動分野は4つく <①国際協力②災害救援③地域活性化④環境保護>。

例えば③地域活性化や④の環境保護に関わって。大阪の淀川を学生200人、子どもたちと清掃活動を一緒に行ったり、琵琶湖に繁殖するオオバナミズキンバイ(外来種)を根っこから取り除いたりしました。オオバナミズキンバイは放っておくと琵琶湖を埋め尽くすと言われていています。去年3日間、600人ほどで、篠ノ井西中の生徒数になりますね。その人数で行いました。私は600人分の食事を仲間10人と協力して作りました。

三重県の熊野古道で毎年行われる観客20万人の大花大会。熊野の住民は5万人です。花火大会を運営するには人手が足りずお手伝いに行きま



す。観客席の設置、花火のセッティング等、そして一緒にお酒を飲んだりして。熊野は大好きな土地で、第2の家族のような気分です。



そして②の災害救援です。西伊豆の台風被害の時です。潮風が吹いて、塩が松の木に張り付く。すると生育が悪くなる。大学生100人ほどで塩を取り除き、木の根に栄養を与えました。広島の水害救援では、家具の運び出し、そして床下からの泥を掻き出しました。床下には機械が入れないのですべて手で掻き出し、土嚢でバケツリレー。全身泥だらけで、こんな大学生がいるんですね。山梨では大雪の排雪にも行きました。

東日本大震災では被災地（仙台山元町）と、大震災から3年経ってカナダに流れ着いた震災漂着物撤去ボランティアに伺いました。仙台では津波で被害を受けた畑を再生させたご夫婦にお会いしました。塩の含んだ固い土地を耕すことで、とても感謝されました。涙を流して感謝された。涙を流し感謝されたことって、皆さん今までにあります？こんなに重いことなのかと痛感しました。

そしてカナダでの活動。70人で島までボートで移動しました。船酔いしつつ、海岸線での漂流物撤去。カナダは震災後、巨額の支援を日本にしてくれました。それに対して日本人は何をしたのだろう。カナダ人が撤去しているのに、私たちが何もしないわけにはいかない。恩返しに私は行きました。

講演をお聞きして、生徒諸君からいくつも質問が飛び出しました。

☆山元町へ行ってどんな想いでしたか？

・・・チャンスをいただけた。この地域を忘れずに、ずっと寄り添っていきたいです。そして心が病気になってしまった人に、元気を持って行って元気を置いてきます。

☆ボランティア活動で被災地に行くのは怖くありませんか？

・・・怖さより行かなきゃ、行くしかないという思いが先にありました。

☆カナダに行って、流れついた漂流物の量はどのくらい？また漂流物の中で日本の物だと分かったのはいくつ？

・・・3万トンです。地域や名前が特定できたのはわずか3件くらいでした。

☆ボランティア活動をやめたいと思ったことがありますか？

・・・ありますよ、何回も。体力とお金を非常に使いますから。だからやめたいと思うことがあります。

☆ボランティア活動を通して学んだことは？

・・・< 学生は微力かも知れないけど無力ではない。 > < 感謝されることの喜び。 >
< 現実とのギャップ楽しいことばかりではないということ > (被災地には元気じゃないお年寄りがたくさんいらっしゃいます。人に使われるし、想いが通じない時もあります。学生のよそ者に何ができるんだって言われます。コミュニケーションがとれないと何にもなりません。)

体力とお金をたくさん使う・・・だからやめたいと思うことが何度もある。西沢さんのきれいごとではない、けれどだからこそ困っている方々のために具体的に何かをしたいという誠実さに触発されるように、生徒諸君の質問は途切れることがありませんでした。情熱的な推進力に向き合い、そこからより学びたい、知りたい、という追究心が生まれたひと時でした。

そして、ボランティア委員長はお礼の言葉の中で、～これから社会に出て人と助け合っていくことを忘れないでください。～と伝えてくれました。講演会が終わり全校生徒の退場した後、会場を片付けてくれているボランティア委員会の諸君の姿があります。まっすぐな先輩の考えに触れて、後輩諸君は淡々と片付けに向き合っていてくれました。ボランティア委員会の皆さん、企画運営ありがとうございました。



《 毎日の美味しい給食～ 長野パルセイロ献立 ～ 》

毎日いただいている給食の紹介です。何気なくいただいているのですが、その季節毎の献立や組み合わせの妙に食事時の会話が弾みます。

20日(水)には「パルセイロ応援献立」が用意されました。(報道もされていきましたね。) オレンジカラーに染まった給食をいただいていると、新設なった総合球技場で「AC長野パルセイロ」のサポーターになった気分です。栄養士さんや調理員さんの、皆さんの遊び心にうれしくなってしまいます。6月の献立には、ご当地B級グルメの「長野ヤキメン」が待っています。



きゅうしょくセンターだより

5月20日(水)

今日の献立	〈長野パルセイロ応援献立〉	中学校
食パン	牛乳・野菜スープ	
鶏肉のオーロラソース	橙CONサラダ	
みかんジャム	です	

今年3月、第二学校給食センターにも近い、南長野運動公園に、新しい「総合球技場」が完成しました。今日は、そこをホームスタジアムとして長野市で活躍するサッカーチーム「AC長野パルセイロ」の応援献立です。「チームカラー」のオレンジ色の献立を考えました。スープには、チームが活躍して「勝ち星」を重ね、長野の「星(スター)」となるように、調理員さんたちが星型人参をたくさん作ってくれました。サラダには、篠ノ井地区の人たちがパルセイロを応援する気持ちを込めて考えたオレンジ色のうどんを入れてみました。3月から11月まで、球技場では長野パルセイロの試合が開催され、近くを通ると熱い声援が聞こえてきます。地域のたくさんの人たちの応援を受けて力いっぱいがんばっていますね。皆さんもいろいろなことにチャレンジし、自分の夢に向かってがんばってくださいね。



《クイズ》チーム名の「パルセイロ」とはどんな意味でしょう？

- ① チャンピオン ② パートナー ③ 太陽

《答え》②番の「パートナー」です。ポルトガル語です。地域と手を携えていきたいという願いが込められているそうです。

《 読書のある生活 ～ 読書週間 ～ 》

18日（月）～22日（金）、図書委員会主催の「読書週間」が位置づけられていました。昼休みには先生方からお薦めの1冊の紹介があり、図書館や学年の廊下には書籍紹介について1枚1枚丁寧に書き込まれたカードが掲示されています。きっと、好きな1冊をぜひ読んでほしいという図書委員会諸君の活動と願いが、読書の広がりという意味づけてくれています。仲間の読書紹介に生徒達はしっかりと見入って、次は何を読もうかなと楽しげに思案しています。



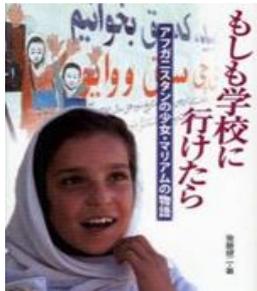
生徒たちは読書を通じて物語の世界に一心に目と耳を傾け、浸り込んでいきます。中学生期の読書はとても価値あるものです。自分が経験できない世界や社会を、「絵本や小説・読み物」を通して追体験していく機会を、何千回・何万回と繰り返すことで、豊かな言語感覚と味わい深い人間世界を手にしていくことにつながっています。

そして西中図書館だより〈栞〉には多くの新刊本が紹介され、若者諸君を待っています。

西中図書館だより 栞

〈 もしも学校に行けたら 後藤健二 〉

学校に行きたい！」そんな少女たちの夢が、ようやくかなうことになったアフガニスタン。けれども、三十年以上も戦争がつづき、大地も人の心も荒れ果てたこの国で、それはかんたんなことではなくて。



〈 昨日のカレー、明日のパン 木皿泉 〉

悲しいのに、幸せな気持ちにもなれるのだ。7年前、25歳で死んだ一樹。嫁のテツコと一樹の父は、まわりの人々とともにゆるゆると彼の死を受け入れていく。なにげない日々の中にある「コトバ」の力が心にしみる連作小説



〈 目でことば おかべ たかし 〉

「青写真」「いぶし銀」「垣間みる」「猿も木から落ちる」「ひよんなこと」「狼狽」など、38のことばの由来となったものを写真で紹介。言葉の詳しい解説と関連情報も掲載



作家の椋鳩十さんは「読書」について次のように言及されています。

〈 手段としての読書・価値としての読書 椋鳩十 〉

読書から、どういう感動や喜びや興味を感じたかということ、何十回あるいは何年も繰り返すことによって、それぞれの人間の心が創られていくのである。温かい心の人、清らかな心の人、豊かな心の人等々、といった人の心は、どういうものに感動し、どういうものに喜びを感じ、どういうものに興味をもったかの繰り返しが創るものである。～